

若者の知的人材交流の未来に向けて

中華人民共和国駐日本国特命全権大使 程 永華

日本の社会科学分野の一流大学である一橋大学を訪れることができ嬉しく存じます。一橋大学は中国の多くの大学と交流協定を結び、教育、学術などの分野において交流・協力を幅広く繰り広げており、中国でも高い知名度があります。特に触れておきたいのは、ここを卒業した大平正芳元首相が中日関係の再建と発展に大きく貢献したことであり、彼は中国の国民によく知られて、尊敬されている人物であることです。本日、大平元首相の母校で将来の日本の社会と経済の発展を支える多くの優秀な人材と交流できることを非常に光栄に存じます。

本日は、若者の知的人材交流の未来に向けてというテーマで、私は自分の経験を例に挙げて話を進めたいと思います。というのは、私自身がまさに皆さんと同じ年齢の時期に、国交正常化後、中国政府が初めて日本に派遣した留学生として日本の大学キャンパスに通っていたからです。それは46年前、1973年のことでした。日本の大学キャンパスの中で学習し生活した体験は、私が直に日本を理解し、心で感じるための最初の窓を開き、また、後日、中国の外交事業に携わるための強固な基礎を築きました。この場を借り、皆さんと四つの経験を分かち合いたいと思います。

一. 若者の知的人材交流ではグローバルな問題を解決する国際的視野を持たなければならない

目下、世界の多極化、経済のグローバル化、社会の情報化、文化の多様化が時代の趨勢となっており、国が異なり、文化的背景が異なる人々の間の距離はかつてないほど近づき、全人類が科学技術革新の成果とグローバル化の成果を共有し、皆さんが情報を手に入れ、知識を学ぶためのルートも一段と多様化しています。しかし、SNSが発達している今日、ご在席の皆さんはトランプ大統領のインスタグラムを即座にフォローでき、スマートフォンで撮った写真を瞬時に地球の裏側に送ることができます。これと同時に、国際社会の相互のつながり、相互の依存が一層緊密になるのに伴い、人類全体の利益がますますクローズアップされています。中日両国を含め、私たちが直面している一国主義、貿易保護主義、テロ活動、気候変動、感染症などの危機はますますはっきりと共通性を示しています。こうした背景の下で、若者はさらなる国際的視野を身に付け、グローバルな課題に責任意識を持つべきです。

現在、中日両国はどちらもある大国との経済・貿易協議に直面していますが、その背景には保護主義と一国主義の台頭があり、経済グローバル化は「逆風」にさらされ

ています。しかし、経済グローバル化は生産力の発展と、科学技術進歩の必然の結果であり、人為的につくり出されたものではなく、また、これを人為的に阻止することもできません。各国はいずれも自身が直面する貿易摩擦の解決に尽力していくこととなりますが、それと同時に、各国の若者、特に国の未来を担う若者も経済グローバル化の問題を根本からよく考えるべきです。近年、中国は「人類運命共同体」の理念を打ち出しましたが、その理念において重要な中身は他でもなく各国がゼロサムゲームの考えを捨て去り、ウィンウィンな協力関係を通じて共同の繁栄を実現することです。私は一橋大学の学生の皆さんもこうした目標を持ち、どのようにして経済グローバル化のますますの発展を導くか、経済グローバル化のプラスの効果をより多く引き出すかを考えるよう希望します。例えば、皆さんは、各国はマクロ政策をどう協調させるか、イノベーションを通して生産力をどう発展させるか、多角的貿易体制にどう効率性と公平性を兼ね備えさせるかについて研究することができます。皆さんが学習と研究を通じ、それぞれ異なる国、階層、グループに経済グローバル化の成果を共有させる道を探り当てることを期待します。

二. 人類の第四次産業革命の到来にあたり、若者の知的人材交流では探究・革新精神を持たなければならない

70年代の日本の若者・学生はいずれも高度経済成長期に育った人たちですが、深い印象を残したのは彼らの多くが知識欲と探求心に溢れていたことです。多くの学生が私のところにやって来て中国の状況について質問しました。社会制度、歴史・文化から庶民の生活に至るまで、私はしばしば彼らの招きに応じて中国のさまざまな事柄について説明しました。こうした交流の中で、私も日本の学生と一緒に、日本社会におけるいくつかの重大な出来事を経験しました。例えば、第1次石油危機が起きた後、私は日本の友人に頼まれて行列に並び、トイレットペーパーの買出しなどをしました。こうした体験によって、私は日本をよりよく理解し、また、日本の70年代の経済転換を研究するうえで多くの生き生きとした背景知識を得たのです。

40年後の今日、日本の多くの若者は出国して外の世界を知りたいとは思っていないと聞きました。OECDの統計によれば、日本からの海外留学生の数は2004年にピークに達した後、減少傾向を示しています。むろん、これは統計の取り方及び日本の人口構造の変化とも関係があります。また、日本の教育関係者が私に話したことですが、一年以下の海外短期留学の規模はいまなお比較的大きいということです。しかし、少なからぬ人々は日本の若者の内向き志向の問題を指摘しました。学生の皆さんは昨年一部の日本メディアがまとめた平成元年と平成30年の世界企業時価総額ランキングに関心を寄せているかもしれません。30年前、世界上位50社のうち日本企業は32社ありましたが、30年後には1社しか残っていません。為替レート、バブル経済などの

要因はさておき、現在上位にランクされている5つの企業、すなわち GAF A とマイクロソフトに注目すると、いずれも産業革命の潮流の先端を歩んでいる企業であって、これは若者にとって大きな啓発となるはずでず。

時代の潮流をつかむことは「知るは易く行ふは難し」かもしれません。しかし、若者の出発点は探究と発見の情熱を保つことに置くべきであり、見知らぬ世界と新鮮な事物に対し探究欲と知識欲を持つべきだと私は思います。日本の社会はすでに十分に成熟しているため、日本の若者はマンネリズムに陥り、創造の原動力が失われやすいのかもしれません。この問題をどう解決するか。イオングループの創設者である岡田卓也先生の言葉を皆さんと分かち合いたいと思います。私は彼と長年の交流があり、イオングループは 1990 年から中日両国の「小大使」(ティーンエイジアンバサダー)交流活動を行っていますが、岡田先生にはこういう名言があります。それは、「成功体験を捨てろと言うのはたやすいが、実行は難しい。新しく創造することは重要だが、より大事なことは如何に過去を捨てるかだ」というものです。

三. 若者の知的人材交流では時代と共に進み、社会の変革を後押しし、新たな問題を解決しなければならない

社会の発展を図るには、若者が自らの探究・革新精神を社会的責任を引き受けることと結び付け、その活力で社会の変革を後押しする必要があります。とりわけ科学技術の進歩は社会の変革のために多くの有利な条件を生み出しました。若者は新しい科学技術を理解、応用する面で他の年齢層にはない強みを持っており、社会の変革を後押しする主な担い手となるのは当然のことです。中日両国はどちらも高齢化の課題に直面していますが、中国の経験から言うなら、シェアリングエコノミー、電子決済、モビリティサービスなどの新しい事物が登場したとき、高齢者がこれに適応するのは確かに難しいことです。しかし、若者は携帯電話などの端末やインターフェースの面で多くの方法を考えつき、高齢者もこれらの科学技術がもたらす成果を享受できるようになりました。さらに携帯電話で資産を運用している高齢者も少なくなく、フィンテックの一大ユーザー群となっています。現在、日本でも PayPay などの電子決済方式が普及し始めており、私も日本がどのような方法で社会の各年齢層にこの便利さを共有させるかに大いに注目しています。これも一橋大学の学生の皆さんの研究課題にふさわしいものだと信じています。

四. 若い世代の知的人材は理性的な態度をとり、他国を全面的、客観的に認識しなければならない

中日両国を例にとると、私は日本の各界関係者に対し、中国がしばしば「群盲象をなでる」の物語を用いてたとえ話をしていることを紹介してきました。複数の目の不

自由な人がそれぞれ象の耳、鼻、足、尾に触れたところ、彼らが描く象の形状も違っていたのです。歴史上の長い付き合い、互いに近くて通じ合う文化、特に漢字を共に使うという特徴は両国の国民に親近感を与え、「同文同種」という言葉もよく聞かれます。しかし、実際には中日両国の国情には小さくない差があり、たとえ全く同じ二つの漢字であっても、その意味は大きく異なる可能性があるのです。例えば、「敷衍」という言葉は中国語ではごまかす、お茶を濁すという意味ですが、日本語の意味は趣旨をおし広げて説明することです。中日両国の国民は相手が漢字を使うから、自分と同じ考え方を持つと思いついてしまえば、誤解を招きかねないと思います。むしろ最初から相手が自分と違う国の人で、違う考え方を持つと理解した上で相手と接しますと、交流する時に相手と自分の共通点が意外に多いことを発見できますし、信頼感も高まってきます。

中国大使館は 2014 年から毎年、中国を一度も訪れたことのない日本の大学生を中国へ招待するとともに、すでに 2 年連続して中国で「中日大学生千人交流大会」を開催し、いずれも好ましい反響が得られました。この 5 年の間に私は二つの現象に気づきました。一つは日本の若者の中で中国に行ったことのない人の割合が多いこと、もう一つは中国を訪れた後、中国と中日関係に対する日本の若者の認識に大きな変化が起きていることです。中日両国には共に百聞は一見に如かずという言い方があるように、その国に行き、そこの国民と直接交流することをしなければ、相手国の全体像を客観的に、本当に理解することは難しいのです。もし一橋大学の学生の皆さんに中国を訪れる機会があったなら、学んでいる専攻と結び付けて、現在の中日両国の社会・文化の共通点及び両国の産業チェーン、バリューチェーンが深く融合している状況をよりよく発見できるものと信じています。中国大使館も皆さんのためにそうした機会をつくりたいと思っています。

以上が若者同士の交流についての私の考えです。皆さんは間もなく大学での学習をスタートさせますが、私のこれらの経験が他の国や職業の人と交流する際の助けになればと思います。皆さんが一橋大学の謹厳な建学理念に培われ、国際的視野を備え、時代と共に進むことのできる人材に成長することを心から希望すると同時に、皆さんがアジアと世界を心に抱き、中日関係に多くの関心を寄せ、将来それぞれの持ち場で中日両国民の相互理解と各分野の協力を深めるために積極的な役割を果たすことを希望します。

ありがとうございました。